

被叙述項と主語の乖離および形容詞の一致対象

田 原 薫

1. Langacker[1995] で言う 'metonymy' と「述語多義化」の誤謬

ラネカーは 'Raising and Transparency' と題して *Language* Vol. 71, No. 1[1995] に掲載された論文で、いわゆる「繰り上げ（構文化）」は《主語の側で起こった metonymy と、それに必然随伴あるいは適応する述語の多義化によって起こる現象》だと主張した。

- 1) That Don will leave is likely₁. 【likely₁ は命題内容を叙述する本来の意味】
- 2) Don is likely₂ to leave. 【古典的にはSSR。多義化で likely₂が派生】
- 3) I expect₁ that Don will leave. 【expect₁ は命題内容を紹介する本来の意味】
- 4) I expect₂ Don to leave. 【古典的にはSOR。多義化で expect₂が派生】
- 5) To fix Volkswagens is easy₁. 【easy₁ は命題内容を叙述する本来の意味】
- 6) Volkswagens are easy₂ to fix. 【古典的にはOSR。多義化で easy₂が派生】

彼によれば非繰り上げ文 1), 3) がそれぞれ繰り上げ文 2), 4) を派生するに至る最初の動機は、'that Don will leave' という事態の中で Don がその 'active zone' であるから、Don が命題全体に代わってその意味を表わす 'metonymy' が起こったのだという。また、5) から6)への過程に際しても、Volkswagens は to fix Volkswagens の 'metonymy' だとも。

彼はその 'metonymy' を説明するのに次のような事例を挙げている。a. Sue heard the trombone. b. I am in the phone book. c. The kettle is boiling.

a, b, cにおいて、実際に聞いたのはトロンボーンから発する音であり、電話帳に載っているのは「私」の名前であり、沸騰しているのはヤカンの中の水であるのに、例文のように言え、上のように理解されるのは、'metonymy' による意味拡張のせいであるという。

確かに上記の諸例では正しい意味での 'metonymy' が働いていると言えるが、それと繰り上げ構文の場合はまったく異なる。正しい 'metonymy' では話し手および聞き手が《トロンボーンが楽器であること》・《電話帳が人名と電話番号とを照合させる本であること》・《ヤカンが水を入れ、沸騰するまで熱するための道具であること》という百科事典的知識を共有しており、おのおの連想網が活性化しているから、言い換えによる指示の機構が働くのである。つまりそれは純粋な認知のレベルの話ではなく、「認識」の世界で起こる話なのだ。しかし偽の 'metonymy' では Don/Volkswagens だけでは何も喚起しないのである。

to leave や to fix といった追加情報を欠いた 'Don is likely.' 'I expect Don.' 'Volkswagens are easy.' のような文は、文法形式面ならともかく、上記 a, b, c が理解されるのとは大違いで、通達面では意味の通じない非文であろう。ラネカーはこんな誤謬と詭弁のため *Language* という晴れ舞台で赤恥をかき、学会誌の権威も傷つけてしまった。

2. 談話的/対話的文脈を無視して述語の多義性は論じられない

さすがに 'Don is likely.' と 'I expect Don.' の独立可能性は主張しなかったものの、ラネカーは 'Volkswagens are easy.' は独立して使える文である、と主張している【その中の述語 easy は派生によってできた easy₂ である】。彼は次のような例を挙げる：

7) When it comes to { fixing/painting/cleaning/selling/stealing/lifting } them, Volkswagens are really easy. 「修理すること/塗装すること/清掃すること/売ること/盗むこと/持ち上げること についてはフォルクスワーゲンは実に楽だ」

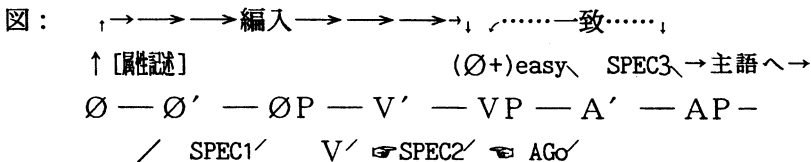
この例文は一人の話し手が語る談話 (discourse) であるが、同様な話題が展開される対話 (dialog) において応答者が単に Volkswagens are easy. とか They are easy. とか答える場合も確かに存在しよう。これらの場合たしかに主語が process や event でなく物になっているから、述語 easy の多義化が起こっている、と一見言えそうである。

しかし、そう思えるのは認識面の主語と認知レベルでの叙述対象とを混同しているからであって、冷静に見れば述語 easy の認知的叙述対象は { } 内に例示した event である。そのことは例文 5), 6), 7) を通じてまったく不変であるから、easy の多義化は起こっていない。easy が異なったタイプの主語に適応したのは認識レベルの問題なのである。

3. ではなぜ 'easy' と主語とが一致現象を起こすのか (SOOTH 2 による説明)

たまたま英語では (比較変化を除き) easy など形容詞が無変化なので、一致現象が顕在化しないが、ロマンス諸語などでは一致現象を示す。たまたま fácil, difícil という形容詞がラテン語第3変化に属する facilis, difficilis に発しているため男女性による区別はない (ただし中性は facile, difficile) が、数による変化は存在し、フランス語でも綴字上 -s の出没が義務づけられる。英語でも 6) では copula の一致を示す。

認知レベルの叙述対象でなく新造の主語に形容詞が一致する機構は図で理解できる。



目的語候補の SPEC2 が SPEC3 へと外転したときに一致の予約がなされるが、SPEC3 の一致の相手は easy そのものではなく、実は easy に編入した \emptyset [属性記述] だったのである。